オケクラフトセンター
森林工芸館の あれ これ

no.06
9
2020

工業デザイナー、著述家、童画家、木工愛好家
様々な肩書きを持ち
幅広く活躍してきた秋岡さんが
置戸との関わりの中で見てきたものは何だったのか
オケクラフトの生みの親
まちづくり、クラフトパーク構想の示唆
秋岡資料の寄贈

置戸に託した、残した思いとは
秋岡コレクションの企画展を前に
みなさんに改めて知ってほしい
秋岡さんと秋岡資料についてまとめてみます

今回は、なぜ秋岡資料が置戸にやって来たのか
秋岡資料寄贈までの流れをお伝えしていきます

秋岡強化月間 前編
秋岡資料がやってきた

人と、木と、おけと

OKE CRAFT オケクラフト

1980年代

◎1983 年第 5 回置戸町民憲章推進大会で故 **秋岡芳夫**さんが講師として来町
「木と暮らしのデザイン」と題して講演
◎1987 年第 9 回置戸町民憲章推進大会で再度講演
「いいものほしいもの～木・食・まちのデザイン」と題して講演
▶過疎地での工芸的発想に基づくまちづくりの重要性を説く
▶クラフトパーク構想の基本的な考え方を示唆

pick up

秋岡芳夫

一九二〇年
熊本県生まれ。
一九五七年
KAKデザイングループ設立。
一九七〇年
東京中野で有志のサロンを母体に「グループモノ・モノ」を創始。
自らを「立ち止まった工業デザイナー」と名乗り、「消費者から愛用者へ」「裏作工芸」などのアイディアを生活者に提案するとともに、全国各地の手仕事の復興や地域再生に尽力した。

1990年代

◎1991 年「クラフトパーク計画策定委員会」策定委員に委嘱
◎1992 年「**クラフトパーク計画策定**」pick up
▶「森林生活都市おけとをめざす～クラフトパーク計画報告」
・計画策定委員の 1 人であった秋岡さんが 1 年あまり議論を重ねる中で、「**生活学博物館**を建て、観に来た人に触れて、使って、貸し出すモノの図書館として機能することができるなら」と、秋岡さんが集めた膨大な生活工芸資料を置戸に寄贈することを提案
・このことから、クラフトパーク計画の中核として生活学博物館の設置が盛り込まれた
◎1994 年 クラフトパーク実施計画策定 / **どま工房**開設 pick up
・五感の全てを通して道具とつき合う**【モノの図書館構想】**の具体例として「土間」をデザインする
◎1997 年 秋岡芳夫さん逝去
・オケクラフトの誕生以来、置戸のまちづくりのグランドデザインを示唆し続けてくれた秋岡さんが逝去
・芳子夫人より「**秋岡資料**のすべてを置戸に寄贈したい」という申し出を受け、膨大な数の資料を譲り受ける pick up
◎1998 年 どま工房生活資料研究員の配置
・秋岡さんの事務所スタッフであった増田倫子さんが研究員として置戸に移住
・膨大な数の秋岡資料を 1 点ごと製作地や年代、材質、使い道等を丹念に調べていく作業が続いた

pick up

クラフトパーク構想

オケクラフトの誕生にも関与した東北工大第三生研は、オケクラフトを中核とした工芸的な町づくりを推進する置戸と共同研究を進めるため、一九九〇年に同研究室の置戸分室を設置。翌年に「置戸町クラフトパーク計画策定委員会」が設けられた。
町は秋岡さんとの話し合いから「地域の資源である森林や農産物の質の向上、付加価値のある地域産業を育成するとともに工芸的な考え方に基づく町づくり」を進めた。

クラフトパーク
イメージ図

どま工房

どこの農家にもあった土間が持つ機能を大切に、交流を図ることを目的として秋岡さんが命名した施設。
家庭の味、仕事の技、情報を持ち寄り、時間と空間を共有しながら地域文化を高めていこうというもの。また、秋岡資料の収蔵基地としての役割を持つ。

どま工房

秋岡資料

秋岡さんが半生をかけて収集した手仕事道具や、手仕事で作られた生活用具約六五〇〇点、関連資料など一万一三二〇点、合計一万八千点からなる資料。
工業化社会の中で失われていく手の技。特に優れた日本の木工技術に注目した秋岡さんが、これらの道具を未来へ継承するために残した資料。

『秋岡強化月間 後編』▶あれこれ no.07 では秋岡さんのこと、「日本の手仕事道具 - 秋岡コレクション」ことについてお伝えします

おーい

塾生さん、いま何してる？

『第１作目の出来上がり』

▼千龍さんは、六月からお椀とお皿の製作実習をしていましたが、遂に先日、第一作目の作品達が完成しました！

木工ろくろで作品の形を仕上げた後、日常使いできるようにするために「塗装」をします。プレポリマーで樹脂含浸後、エアーガンを使って下塗り→中塗り→仕上げと塗り重ね、乾燥させたら完成です。

千龍さんは「エゾマツやセンなどの木材を使って製作したんですが、樹種によって削りやすさの違いを実感しました。塗装は塗料がしっかりのっているのか分かりづらい部分があり大変でしたが、やっと作品ができて嬉しいです。」と、はじめての作品に対して思いを語っています。

【用の美とは】

用の美という言葉は、1926 年に始まった「民藝運動」から生まれた考えで、思想家で民藝運動の中心人物であった柳宗悦（やなぎ むねよし）によって提唱された考え方です。

用の美とは、「使うことに忠実に作られたものに自ずと生ずる自然で暖かみのある美しさ」のことをいい、この考え方は現代のモノづくりにも通じる課題といえます。

柳は、**「今の器が美に病むのは用を忘れたからである」「実用を離れるならば、それは工芸ではなく美術である」**と話し、使われることによって輝く「用の美」の考えを提唱しました。

秋岡さんが半生をかけて収集した秋岡資料も、生活の中で使い手が必要として求めたモノ、使われることを念頭に作られたモノたちです。そこには職人の手仕事が残る生活用具や、使い込まれ、手に馴染んだ自分だけの手仕事道具が含まれます。一見すると、どこにでもあるモノかもしれませんが、使い手・作り手の思いの深さが込められています。

ふかよみコレクション

今月のふかよみコレクションは特別編
秋岡資料と関連深い「**用の美**」について説明します

今月の一品

かくれた一品　おすすめの一品
毎日　オケクラフトとともにいる
私たちの一品をご紹介します！

商品名：名刺ケース
サイズ：幅　74㎜
　　高さ 105㎜
　　奥行 14㎜
価　格：9,000 円（税抜き）
樹　種：イタヤカエデ、タモ他

ビジネスマンの必須アイテム名刺ケース。Wood landers’木那作です。マグネット式のフタは閉める度に「カチッ」と音がするのが心地よく、材料に**「バーズアイ」**を使用している所がまた良いと思います。自然の木材に錯綜してできたこのような杢は商品価値が非常に高く貴重ですが、実は生育異常によるもので、この杢を製品に仕上げるにはコツがあり、経験が必要です。木取りの仕方によって活かされた木目が特徴的なこの名刺ケースは存在感があるワンランク上の一品ものです。

ショップスタッフ
福井

森林工芸館・どま工房からのお知らせ

どま工房では、**10**月に開催する【日本の手仕事道具 ― 秋岡コレクション 企画展】の準備に伴い、**9**月**19**日から**12**月**6**日の期間、どま工房の貸館を休止いたします。

ご利用いただいている皆さまのご理解とご協力をお願いいたします。

なお、**12**月**7**日からは貸館を再開いたします。**企画展は10月10日から11月23日まで**の期間となります。感染対策を万全にお待ちしています。

「自然の中に生きるということ」

季節便り７月号からは、森林の中に多くの動物たち、そして樹木や植物が生活していることを改めて気付かされました。人間本位での捉え方はいけませんね。

さて、「自然の中で生きる」ということは、その環境に適応していくことが必要となってきます。それは動物たちだけではなく樹木も例外ではありません。例えば天災や動物が原因で傷を負ってしまった場合、そこで命を落としてしまうものもありますが、樹木達も生きる術を身につけています。松からは松脂が、漆の木からは漆が。これらは傷口を消毒し修復の役割を担っているとも言われます。また今月の一品で紹介した「杢」は、樹木がその環境に自らを適応しようと、内部応力で最適化することで生まれた癖が杢となって現れるといいます。

生きるための努力は美しさとなって現れます。そんな樹木に敬意をはらい形にするのは作り手 の使命。そして愛着を持って使い続けることは使い手の使命のように感じます。

鳥眼杢（ちょうがんもく / バーズアイ）
カエデ類に多く見られる杢で、小鳥の目のような小さな円形の斑点が、板面上にたくさん散らばって現れます。

ウルシの木
漆はウルシの木から採れる樹液。樹皮に傷がついた場合、その傷口を塞ぐように黒く変色し固まり、樹液を保護する。